

『雨月物語』における接続助詞「ツモ」をめぐる覚え書き

神戸 和 昭

はじめに

上田秋成の読本『雨月物語』には、

赤穴又頭かしらを揺ふりてとゞめつもも、更さらに物をもいはでぞある。(長島二〇一八53頁6行)

に見えるような「ツモ」という特異な形の接続助詞が少なからず――後述の通り、筆者の調査では都合10例――使われている。

この『雨月物語』における「ツモ」について、一般的にどのよう理解されているかを知るために、『雨月物語』の注釈書類のいくつかを参看してみよう。

- a. 「つ」はもと完了の助動詞であるが、こゝでは〈中略〉接続助詞「つ、」と同じ意に用いられている。「も」は強意の係助詞。「雨月」にはこの「つも」が非常に多くあらわれ、これは秋成の特殊な語法と見られる。(岩淵・宮本一九五五51頁)

b. 「つ」は完了の助動詞、「も」は強めの係助詞であろうが、「つも」の形で、この書では、「つつ」と同意に用いる。(村一九五九383頁「補注五」)

c. 「つも」は、形としては、完了の助動詞「つ」に、強意・感動を表わす係助詞「も」がついたように見えるが、秋成はしばしば「つも」を慣用して、実は〈中略〉「つつも」と同意を表わしている場合が多い。(鶴月一九六九26頁上段)

d. 「つ」は完了の助動詞、「も」は強意の係助詞であり、「つも」で「つつも」と同意に使っている。秋成の文によく見られる用法である。(浅野一九七九30頁「頭注二」)

e. 「つ」は完了の助動詞。「も」は強意の係助詞。〈中略〉秋成の特殊語法。(高田一九九五292頁「頭注一一」)

右に列挙したように、その記述に繁簡の差はあるものの、内容的には軒並み同工異曲の説明が繰り返されていると言つてよい。すなわち、『雨月物語』の注釈書類からは、

「ツモ」は〈完了の助動詞「つ」+強意の係助詞「も」〉に由来し、「ツツ(モ)」と同意に用いられるもので、上田秋成独

自の特殊語法である。

という共通理解が抽出されよう。

しかし、ここから直ちに次のような疑問点・問題点が生ずる。

①「ツモ」の「ツ」が本来完了の助動詞「つ」由来のものだとしても、その接続助詞化に関する言及がまったくなく、説明に飛躍がある。

②この「ツモ」は「ツツ(モ)」と同意とされるが、筆者の調査では『雨月物語』中に「ツツ(モ)」が計25例使用されており、もし本当に両者同意だとするならば、なぜ「ツモ」と「ツツ(モ)」の両形式が併存しているのか。

③接続助詞「ツモ」は秋成独自の特殊語法だと言うが、『雨月物語』以外の秋成作品における使用例が具体的に挙げられることはなく、「秋成独自」の意味するところが曖昧である。ばかりか、後述するように、秋成以外の作者の使用例も報告されている。

以下、この三点につき私見を述べていこうと思う。調査・引用テキストには「長島二〇一八」を使用した。

一・「ツモ」の使用範囲

順序が入れ替わるが、はじめに前記③の点——接続助詞「ツモ」の使用がどの範囲に限られるのかという問題——から取り上げた

い。

まず、秋成の、『雨月物語』以外の作品中にも「ツモ」が用いられているかどうかについてであるが、管見では、未だかつてそのような実例が確例として示されたことを知らない。

ちなみに、『角川古語大辞典』の「つも(接助)」の項には、

近世、「つつも」と同様に用いる。「つつ」とほとんど同義。

『雨月物語』に例が多い。

と説かれている。のっけから「近世」と非限定的に大きく謳ってあることから、接続助詞「ツモ」が近世ある程度の広がりを経て、秋成以外の作者においても用いられていると(も)取れる記述となっている。しかし、その挙例を見ると、案に相違して『雨月物語』中の1例のみにとどまっている。

その点、『日本国語大辞典 第二版』の「つも(接助)」の項の挙例として、『雨月物語』だけでなく、

重さ十斤ばかりもあらん、それをひらつつみして、肩にひしと負ひつも、からうじて白石の駅までもち出たり

という、与謝蕪村の俳諧句文集『新花摘』中のものが掲げられていることは注目に値する。筆者の知る限り、秋成以外の作者の「ツモ」の実例として提示された、これは唯一の貴重な存在である。¹⁾

『新花摘』(安永六年(一七七七)成、寛政九年(一七九七)刊)

は『雨月物語』（安永五年（一七七六）刊）より明らかに後の作品であることに加え、秋成は「俳諧では蕪村・几童らと親しく交わった」（長島二〇一八「解説」221頁）といい、蕪村と秋成には親交があった事実も認められることから、蕪村が直接『雨月物語』に目を通し、そこに見える特徴的な表現である「ツモ」を自作にも採り入れたものであると、一応は考えることが出来る。しかし、『新花摘』の当該箇所が「つも」であるのは、蕪村（享保元年天明三年（一七一六―一八三）の歿後に刊行された流布本たる版本においてであり、原型をとどめていると評価される写本（逸翁美術館蔵本）では「つゝ」となっている（藤田二〇一六276頁「脚注17」）。したがって、『新花摘』において「つも」とされる当該箇所は、控え目に言っても、本文に問題があつて確例とはなしたがたしい。

結局、『雨月物語』以外から接続助詞「ツモ」の確例が得られない以上、少なくとも現時点では、この「ツモ」は秋成自身の創始にかかるものであり、秋成作品でも『雨月物語』独自の語法と見るのが穩当である。

二、「ツモ」と「ツツ（モ）」

次に、前記②の点——『雨月物語』における「ツモ」と「ツツ（モ）」併存の問題——について考えてみることにする。

既述の通り、『雨月物語』には「ツツ」10例が見える一方、「ツツ（モ）」が計25例用いられている（内訳は「ツツ」17例、「ツツ（モ）」8例）。ここで、「ツモ」と「ツツ（モ）」の用例を比べてみて

すぐに気づくのは、例えば、

- (1) 左門ちかくよりて、「(中略)」とて、あるじと計りて、葉をえらみ、自方を案じ、みづから煮てあたへつも、猶粥をす、めて、病を看ること同胞のごとく、まことに捨がたきありさまなり。(45―12)
- (2) 湖水の碧なるを見るより、現なき心に浴て遊びなんとて、そこに衣を脱去て、身を跳らして深きに飛入つも、彼此に遊めぐるに、幼より水に狎たるにもあらぬが、慾ふにまかせて戯れけり。(92―06)

のように、「ツモ」の方には特にその前の部分において接続助詞「テ」が頻出して、いわば「テ」ツツモという固定化した表現パターンで「ツモ」が用いられていることが目につくのに対し、「ツツ（モ）」の方は、

- (3) 「大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足す。◎吾いま母公の慈愛をかふむり、賢弟の敬を納むる。何の望かこれに過べき」と、よろこびうれしみつゝ、又日来をとままりける。

(49―04)

- (4) 勝四郎が妻なるものも、いづちへも通れんものをと思ひしかど、「此秋を待」と聞えし夫の言を頼みつゝも、安からぬ心に日をかぞへて暮しける。(68―02)

のように、「ツツ」とは対照的に、その前の部分に接続助詞「テ」

が現れにくいという顕著な傾向である。

そこで、あらためて「ツモ」と「ツツ(モ)」の全用例について、当該の「ツモ」「ツツ(モ)」の前の部分に接続助詞「テ」が現れているかどうかを比較してみることにしたい。ただし、単に「前の部分」としただけでは判定に曖昧な部分が出てくるため、論点を明確にすべく「前の部分」の範囲を厳格に限定することとし、

「ツモ」「ツツ(モ)」と同一文中かつ、当該の「ツモ」「ツツ(モ)」の2文節前までの範囲内に接続助詞「テ」が現れるかどうかを調査する。

という方針を立てた。その調査結果は左表の通りである。

【表】直前に出現する接続助詞「テ」の有無

ツモ	テ有	テ無	テ出現率
4例	9例	1例	90%
ツツ(モ)	21例		16%

右表から明らかのように、果たしてその直前部分に接続助詞「テ」が出現するかどうかで、「ツモ」と「ツツ(モ)」とは大きく異なる傾向を見せている。

このことを踏まえて、さらに細かく用例を検討していきたい。まず「ツモ」の方から具体的に見ていくことにしよう。「ツモ」のうち「テ有」の9例は、左に列挙する通りである。

戸を推て入^こつも (45 | 06) / みづから煮^にてあ^らへ^つも (45 | 12)
／頭^{かしら}を揺^ゆるとめ^めつも (53 | 06) / みづからま^うで、手^てをとり^つも (60 | 12) / い^かで浮^う木^きに^のり^つも (67 | 04) / 見^み捨^すず^していたはり^つも (70 | 12) / 居^いめ^めぐり^りて守^{まも}り^つも (87 | 06) / 身^みを跳^とり^りて深^{ふか}きに飛^とり^り入^いつも (92 | 06) / 傘^い取^とり^りて出^いる^を、見^み送^{おく}り^つも (14 | 10)

また「ツモ」でただ1例の「テ無」、すなわち直前に「テ」が出現しなかった用例とは、『雨月物語』の開巻劈頭に位置する「白峰」冒頭部における、

(5) (前略) 猶西^{なほ}の国^{くに}の哥^{うた}枕^{まくら}見^みまほしとて、仁安三年の秋は、
霞^{あせ}が^ちる難^{がた}波^{なみ}を^経て、須^す磨^ま明^{めい}石^{せき}の浦^{うら}ふく風^{かぜ}を^身にしめ^つも、
行^ゆ々^ゆ讃^{さん}岐^ぎの真^ま尾^お坂^{さか}の林^{はやし}といふにしばらく筍^{たけのこ}を^植む。(23 | 09)

のことである。本例はたしかに「ツモ」の直前に「テ」が出現してはいないが、ここはひたすら美文調の「道行文」が続く——一文がテキストで延々8行にも及ぶ——、表現上非常に息の長い箇所であり、文章のリズム自体が他とは大きく異なることを斟酌してより広い目で見れば、やはりここでも「テ」ツモという固定的表現パターンで「ツモ」が用いられていることに本質的な違いはないと言つてよい。

では、「ツモ」が「テ」と共起するという、この確乎たる傾向は何を意味するのであろうか。

そこで、もう一度前掲の用例(1)・(2)・(5)を見てみよう。試みに、

ここで用いられている「ツモ」を仮に接続助詞「テ」と置き換えても、文意上、何等支障のないことが注意される。つまり、この「ツモ」は実質的に「テ」と同意——具体的には「単純接続」——であり、「テ」の連続を避けるという文修辞上の要請により、前の部分に「テ」が使われた場合、実質同意の「ツモ」を用いて置き換えたもの、と解することが可能である。

なお、注釈書類・辞書類では接続助詞「ツモ」の基本義が、多く

：しながら。動詞の連用形に付いて、その動作をしながら、あわせて次に示される動作をもすることを表わす。(『日本国語大辞典 第二版』「つも(接助)」の項)

のように、「くながら」という「同時進行」の意で捉えられているが、例えば、すでに掲げた、

(2) 湖水の碧なるを見るより、現なき心に浴て遊びなんとて、
そこに衣を脱去て、身を跳らして深きに飛入つも、彼此に遊
めぐるに、幼より水に狎たるにもあらぬが、慾ふにまかせて
戯れけり。(92-106)

の「ツモ」を「くながら」という「同時進行」の意で解することには大きな無理があると言わざるを得ない。しかし、『雨月物語』の「ツモ」の基本義を「テ」と実質同意の「単純接続」として捉えれば、当例をも含めて『雨月物語』中の「ツモ」全例を矛盾な

く統一的に解釈することが出来る。

他方、『雨月物語』に見える「ツツ(モ)」計25例についてであるが、ここでまず取り上げたいのは、古典学者でもあった秋成の万葉集注釈書『檜の柚』(寛政十二年(一八〇〇)起稿)における次の記述である。

国語に、雪は降つ、は、降つくと云義にて重語也。(植谷一九九一95頁)

また、秋成が同郷の門人・池水秦良の遺稿を「全面的に改稿し」「秋成の見解をもつて一貫」(植谷一九九三「解題」490頁)したという『万葉集目安補正』(寛政八年(一七九六)成、文化六年(一八〇九)刊)は、『万葉集』の語句を五十音順に配列・解説した、近世における万葉語辞典の嚆矢とされるものであるが、同書の「乍」の条に、

此語は、物を云重ぬる也。雪は降つ、は、雪はふりつ、雪はふりつと云義にて、他もすへて此ことわり也。(植谷前掲215頁)

とあり、『檜の柚』と同様の理解が、より丁寧な表現で示されている。これらによれば、秋成は「つつ」の本義——「他もすへて、此ことわり也」とあって、秋成がその意味を一般化して捉えていることが明言されている——を、「物を云重ぬる／重語」すなわち今いう「反復・継続」の意と認識していたことが明らかである。

秋成のこの認識が『雨月物語』においても反映されているかを見るために、『雨月物語』における「ツツ(モ)」の意味を逐一検討してみたところ、全25例のすべてが「反復・継続」の意と解し得るものであった。『雨月物語』における「ツツ(モ)」の基本義を「反復・継続」と捉えて不都合はないと言える。

『雨月物語』の「ツツ(モ)」の基本義が右記のように「反復・継続」にあるとすれば、「ツツ(モ)」に上接する動詞の表す運動の実現には、当然ある程度の時間経過的な長さが必要とされるはずである。

そこで、そのことを見るために一種の便法として、『雨月物語』の「ツツ(モ)」の前後に、ある程度の時間経過的な長さを示す表現が見られるかどうかを確認してみたところ、

(6) 終夜供養はつしやくぐうしたてまつらはやと、御墓みはかの前のたひらなる石の上かみに座まをして、経きやうもんしづか・文ぶん徐じゆに誦ずしつ、も、かつ哥うたよみてたてまつる。(25-09)

(7) 〈前略〉出雲の国にまかる路みちに、飢うへて食しよくを思しはず、寒さむきに衣きぬをわすれて、まどろめば夢ゆめにも哭なきあかしつ、十日じふにちを経て富田とみだの大城おほしきにいたりぬ。(60-03)

をはじめ、以下のように、「ツツ(モ)」全例においてその種の表現が認められることがわかった。

終夜はつしや誦ずしつ、も(25-09) / 日々ひび約ちぎりつ、も漸だ(46-06) / よろこびうれしみつ、日ひ来わら(49-04) / 長嘘ながいそをつぎつ、

しばしして(53-12) / 哭なきあかしつ、十日じふにちを経て(60-03)

夫おつとの言ことばを頼たのみつ、も日ひをかぞへて暮くしける(68-02) / 京みやこに行いて心こころならずも逗とどりしより、前夜まへよのあやしきまでを詳くわらかに

かたりて告つげつ、も(82-07) / 声こゑを放はなて歎なげきつ、も、其夜そのよはそこに念ねん仏ぶつして明あけしける(83-11) / この里人このむらびとはもとより、

京みやこの防人まもり等ら、国くにの隣となりの人ひとまでも、言ことばをよせて恋慕こひしのばざるは

なかりしをて手て兒こ女によ物ものうき事ことに思おもひ沈しづみつ、(84-07) / 碁碁を囲かこみ、桃ももの実みの大おほなるを啗くわみつ、奕碁の手段しゅん「困こま碁碁ノ対局たいきよく」

を見る(91-07) / 茂しげみをわけつ、天あまの川がはといふより躡ので、摩尼まにの御山ごさんにいたる(100-05) / 閑ひまに念ねん仏ぶつしつ、も、夜よの更さらゆくを(101-10) / 大師おほしの御名ごなをせはしく唱となへつ、漸だ日出ひ

る(114-11) / 往いて香央かさだに説とば、彼方かなたにもよろこびつ、妻つまなるものにもかたらふに(118-09) / 父ちち是こゝを憂うれふつ、思おもふは

とて、強つよて掟おきて「シツケ」をもせざりけり(137-09) / 外ほかの方かたに麗うるはしき声こゑしてといひつ、入い来るきを(139-03) / 〃と思おもひ

つ、すこし身み退ひきて(139-10) / 酒菓しゆか子こ種たぐひ々と管待くだりしつ、(142-03) / 〃といひつ、立た出だるは真ま女な子こなり(143-03) / よ

わく〃見みをはりて、長嘘ながいそをつぎつ、もいふは(152-08) / 檜ひのき破やぶ子こ打散うちして喰くつ、あそぶ(164-11) / 人々ひとびといよ、恐おそれ惑まどひ

つ、〃拜をがみあへり(166-06) / 庄司しやうじよろこほひつ、馬うまを飛としてかへりぬ(177-08) / 口くちのうちにつぶ〃と念ねんし給たまひつ、

(178-05) / 戯はれつ、も〃はた喫くひつくしぬ(184-08)

以上、『雨月物語』における「ツツ(モ)」と「ツツ(モ)」との意味の違いについて細かく検討してきたが、さらに、それらと意味的

に重なる部分がある接続助詞「ナガラ」についても触れておこう。
『雨月物語』中で「ナガラ」は、左記の通り全5例使用されている。

になるわけである。

三・「ツモ」の成り立ち

使異し（つかひちがひ）みながら（つかひみながら）彼館（かのみだち）に往て（い）（90-08）／我弓の本末（わがゆみ）をもし

りながら、かくいひがひなからんは（176-08）／おのれは俵（はう）禄（ろく）に飽（あ）たりながら、貧（ひん）しきをすくふ事（こと）をもせず（204-01）／賤（いぢ）しきを扶（たす）く意（い）ありながら、いとまなく（204-11）／人（ひと）にも志誠（まこと）ありながら、世（よ）に窮（せほ）られてくるしむ人は（211-03）

これらの意味を確認してみると、

(8)おのれは俵禄（はうろく）に飽（あ）たりながら、兄弟（あにちやから）一属（いちぶ）をはじめ、祖（おや）より久

しくつかふるもの、貧（ひん）しきをすくふ事（こと）をもせず（後略）（204-

01）

のように、全例が「逆接」の意と解されるものであった。

したがって、『雨月物語』における三種の接続助詞「ツモ」「ツツ（モ）」「ナガラ」の基本義には、

ツモ … 単純接続

ツツ（モ）… 反復・継続

ナガラ … 逆接

のような、意味による画然とした使い分けが存在するというこ

最後に、前記ポイントの①である「ツモ」の成り立ちについて考えてみよう。

言うまでもなく「ツモ」は、語構成上「ツ」＋「モ」に分解される。「モ」は係助詞「も」——意味的な説明としてはやや大まかながら「強意」——として特に差し支えはないと思われるので、問題はいつに「ツ」の素性にかかっているが、このことについては比較的簡単に説明が可能である。

例えば、「小田二〇一五」を繙くと、

院政時代には、助動詞「つ」「ぬ」「たり」の終止形を重ねて用いて、2つの動作が並列していることを表す用法が生まれた。「…つ…つ」の句型（501頁）

として、

閉ぢつ開きつ入る事を得ず（『今昔物語集』24-5〈12世紀前半成〉）

をはじめとする実例が挙げられてい、さらにそれに続けて、

「つ」が単独で「…しながら」の意を表すことがある。この

ような「つ」は接続助詞と認定される。(502頁)

として、

物乞ふに従ひつ取らす。(『古本説話集』62〈鎌倉初期頃成〉)

をはじめとする実例が掲げられていることが留意される。

完了の助動詞「つ」の終止形「ツ」が文中で一種の中止法として用いられるようになったことから「つ」の助詞化が生じたものと思われるが、このように、「つ」が歴史的に略々「助動詞↓」「院政期」並立／並列助詞↓「鎌倉期」接続助詞」と新たな用法を派生していったことを踏まえてみると、「ツモ」の「ツ」は本来的には完了の助動詞「つ」に由来するものではあるが、直接的には鎌倉時代に発生した、接続助詞「つ」としての用法を踏襲したものと解される。

ただし、秋成はその際、「くしなながら」という「同時進行」の意味までを機械的に採り入れるようなことはせず、「単純接続」という新たな意味をそこに付与し、形態的にも係助詞「も」を結合させて「ツモ」という新たなカタチをもった独自の接続助詞を作り上げたのであった。

なお、現行の辞書類には、接続助詞「ツモ」について、

f. 「つつも」〔接続助詞〕「つつ」＋係助詞「も」の転(『ベネッセ

古語辞典』「つも(接助)」の項)

g. 「つつも」の変化したものの。(『日本国語大辞典 第二版』「つも(接助)」の項)

のように「つつも」に由来すると説くものも見える。その根拠については詳らかにしないが、恐らくこれは、『雨月物語』中の「ツモ」と「ツツ(モ)」とが同意であるとの諸注釈書類の解釈を前提として案出されたものと思われる。しかし、上述のとおり、その「前提」自体が首肯しがたいものである以上、到底右記「つつも」由来説には与し得ない。

おわりに

「二」「ツモ」と「ツツ(モ)」の章で、『雨月物語』における三種の接続助詞「ツモ」「ツツ(モ)」「ナガラ」の基本義には、意味による画然とした使い分けが存在することを指摘したが、本稿を閉じるにあたってまず、そのことを歴史的な観点を交えて捉え直してみたい。

「ツモ」のもとになった「ツ」の接続助詞としての用法の発生は鎌倉時代、「ツツ(モ)」の「ツツ」の反復・継続の用法は上代以来、「ナガラ」の逆接の用法の発生は中古、というように、語ごとにそれぞれ異なる時代の用法が取り込まれており、作品全体としてこれを見れば、さまざまな時代の用法が渾然一体となった、いわば歴史的重層性を強く示していると言える。

このような歴史的重層性は、かつて筆者が芭蕉紀行文・日記・書簡における格助詞「の」「が」の用法を調査した際にも見られ

た（神戸一九八八）が、作者もジャンルも年代も異なる作品間に共通して現れていることから、これは近世文語に広く認められる特色である可能性が考えられる。

また、「ツモ」は、その前の部分に「テ」が使われた場合、「テ」の連続を避けるという文修辞上の要請が働き、「テ」と置き換えるために「テ」と実質同意の「ツモ」が用いられたものと解されることを述べたが、このような修辞的技術による語法上の意図的操作の存在は、小松寿雄氏の調査された『雨月物語』における係結びにも見られ（小松一九七四）、芭蕉作品の格助詞「の」が「 」についても報告されている（神戸前掲）ことから、これまた近世文語に広く認められる特色である可能性が高い。

さらに、「三」「ツモ」の成り立ちの章で触れたように、秋成は接続助詞「つ」に単純接続という新たな意味を付与し、形態的にも係助詞「も」を新たに結合させて「ツモ」という独自の接続助詞を新しく創出したが、このような既存の素材（要素）の新たな組み合わせによる新表現の創造は、「小松前掲」の指摘する、『雨月物語』において「秋成が漢字とルビによって、しかも多くは何らかの典拠に基づきながら新しい語を合成した」（121頁）ことと軌を一にする現象として捉えられる。

これを要するに、既存の素材として活用できるものなら何であれ時代やジャンル等に関係なく積極的に選択・採用し、それらを修辞的操作により自家菜籠中の物として運用していくという、まさに鶴的とも呼べるその貪欲さ、融通無碍な自在さが、近世文語全般にわたる大きな言語表現的特色の一つと思われ、特に『雨月物語』ではそれに加えて、素材同士の新たな結合による独自の化

合物の創出に、その言語表現上における錬金術的創造性の一端が窺われると言えよう。

以上、はなはだ複雑ながら、『雨月物語』に見える「ツモ」を中心に言語表現面から、近世文語全般にわたる特色および、秋成ないし『雨月物語』独自の特色の一斑について考えてきたつもりである。

今後機会あらば、また別の観点からの考察をも引き続き行っていきたいと考えている。

【注】

(1) ちなみに、「ツモ」の実例として蕪村『新花摘』の当該箇所を指摘したのは「中村一九五九」が早い（383頁「補注五」）。

『日本国語大辞典 第二版』における挙例の淵源は、その具体的経路は不明ながら、中村にまで遡ると言える。

(2) 用例末尾に付したカッコ内の数字はテキストの頁数・行数。以下同。

(3) 「一文」の認定はテキストのそれに従った。

(4) 「ツツ(モ)」の「テ有」4例については本稿で個別的に取り上げることはしないため、ここでテキストにおける所在を示しておく。83-11/101-10/152-08/164-11。

(5) 「いかで」の「で」の部分は「にて」の變形形であるため、「て」の一種のバリエーションと見なした。

(6) 諸注釈書の中で唯一「 」は、『雨月物語』には〈中略〉「つも」の用例が数多くある〈中略〉が、それぞれの場合で少しずつ意味が違っているようにも思える。つまり「つ

も」がかなり幅の広い意味で『雨月物語』に使われたと解してよいのではなからうか」(114頁下、115頁上)と、素朴な表現ながら、『雨月物語』中の「ツモ」を一律に「〜ながら」という「同時進行」の意で解することへの疑問をいち早く明確に表明している。しかし、最終的には、『雨月物語』の「ツモ」全体を統一的に捉えようとする本稿の立場とは異なる結果となっている。

(7)ただし、このことは『雨月物語』における「ツモ」の中に文脈上、「同時進行」的に解し得るものがあることを否定するものではない。

(8)「ツモ」の「モ」に関し「岩淵・宮本一九五五」は、「この強意の係助詞「も」の用例も、この「雨月」中に頻出し、秋成の特異な語法として注目される」(54頁)と指摘している。なお、『雨月物語』には接続助詞「ツ」が単独で使用された例は見えず、すべて「ツモ」という独自のカタチで用いられている。

(9)例えば「小田二〇一五」483頁参照。

【主要参考文献】

- 浅野三平校注(一九七九)『雨月物語・癩癩談』(新潮日本古典集成第22回)新潮社
- 井上宗雄・中村幸弘編(一九九七)『ベネッセ古語辞典』ベネッセコーポレーション
- 岩淵悦太郎・宮本三郎(一九五五)『雨月物語の解釈と文法』(解釈文法シリーズ11)明治書院
- 植谷 元校訂・解題(一九九二)『上田秋成全集 第二巻 万葉集研究

究篇一」中央公論社

——校訂・解題(一九九三)『上田秋成全集 第四巻 万葉集研究篇三』中央公論社

鶴月 洋(一九六九)『雨月物語評釈』(日本古典評釈・全注釈叢書)角川書店

小田 勝(二〇一五)『实例詳解 古典文法総覧』和泉書院

神戸和昭(一九八八)「近世中期文語文における格助詞「の」「が」——芭蕉紀行文・日記及び書簡を資料とする——」『国語学研究』

28

——(二〇一一)『雨月物語』『春雨物語』における時の助動詞——近世文語文の国語学的研究の一端として——『千葉大学人文研究』40

小松寿雄(一九七四)『「雨月物語」の文章』『国語と国文学』51

4

鈴木丹士郎編(一九九〇)『雨月物語 本文及び総索引』武蔵野書院

——(二〇〇三)『近世文語の研究』東京堂出版

高田 衛校注・訳(一九九五)『雨月物語』『英草紙・西山物語・

雨月物語・春雨物語』(新編 日本古典文学全集78)小学館

長島弘明校注(二〇一八)『雨月物語』(岩波文庫 黄220)3 岩波書店

中村幸彦校注(一九五九)『上田秋成集』(日本古典文学大系56)岩波書店

——他編(一九八二、九九)『角川古語大辞典』(全5巻)角川書店

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編（二〇〇〇―〇二）『日本国語大辞典 第二版』（全13巻・別巻1）小学館
藤田真一編注（二〇一六）『蕪村文集』（岩波文庫 黄210―4）岩波書店

（ごうど・かずあき 千葉大学文学部）